

# 小学生から見た高齢者像

- 大塚 和美（介護老人保健施設 ペあれんと）
- 石井美津枝（身体障害者療護施設 高嶺園）
- 秋山 真理（介護老人保健施設 老健ふなき）
- 小川 文子（グループホーム オアシスことしば）
- 坂野 秀樹（特別養護老人ホーム 日の山園）
- 山内 朱美（介護老人保健施設 グリーンヒル美祢）

## 研究の背景と目的

近年、人口の少子高齢化が言われて久しく、高齢者と子供を取り巻く社会や環境は大きく変化している。嵯峨座らは家族規模の縮小、家族構成の変化、居住形態の変化<sup>1)</sup>を述べている。高齢者は、これら家族の規模や機能、地域社会の変化によって、時間的・空間的に離れているために内孫でさえ疎遠になりがちな状態にあり、高齢者と子供が関わる接点は減少している。血縁関係にない高齢者と子供の交流は、第三者が働きかけていかなければ実現しにくくなっている。

このような社会的な事情のためか、教育現場では教育の一環として各福祉施設に訪問する形での交流がよく行われる。宇部・小野田ブロック内も例外ではなく、いろいろな学校で様々な活動が実施されている。高齢者施設との交流活動を行うことにより、小学生は高齢者に対する理解が深まっていくのではないかという仮説を立てた。世代間の交流を行っている小学生が高齢者に対して抱く感情やイメージを知り、そこから、今後の高齢者と小学生との交流のあり方を考察する事にした。

## 研究方法

### （１）研究対象

①宇部市立A小学校（グループホームの入居者と縦割り班で週２回、掃除時間（２０分間）に外庭の草抜きを一緒に行っている ５年生５５人 ６年３３人）

②宇部市立B小学校（特別養護老人ホームに６年生が年２回、春と秋に訪問している ５年生７６人 ６年生４７人）

※A小学校とB小学校は交差点を挟んで対角線上に位置している。

### （２）研究期間

平成１９年９月１日～平成２０年５月３１日

### （３）データ収集の方法

少子高齢社会と子どもたち（嵯峨座晴夫編集）をもとにグループで調査項目を検討し調査票を作成した。アンケート実施期間はA・B小学校ともに平成１９年１２月中旬である。配付収集は、各担任にアンケート用紙を渡し、アンケート記入後に学校に取りに行った。

### （４）データの分析の方法

収集したデータを学年別、項目別に集計し数値化した。

## 結果

アンケートの回収率

A小学校 5年生55人 6年生33人

B小学校 5年生76人 6年生47人

有効回答率は、A小学校100%、B小学校約98%であった。

### ①子どもたちの生活環境

A小学校5年生の祖父母との同居数は9人／55人中である。(16%)

A小学校6年生の祖父母との同居数は9人／33人中である。(27%)

B小学校5年生の祖父母との同居数は14人／76人中である。(18%)

B小学校6年生の祖父母との同居数は6人／47人中である。(13%)

祖父母と同居したいと思っている児童は両学校とも半数以上で、A小学校6年生は毎日会う割合が高く55%以上となっている。

### ②子どもたちのお年寄りに対してのイメージ

「何歳からがお年寄りだと思いますか」という問に対して両学校とも圧倒的に60歳ぐらいが多く、続いて70歳、80歳、50歳の順となっている。

### ③お年寄りとの関わり方について

お年寄りとの関わりを「した事がない」と答えた児童が、全体で6%となっており、両学校とも何らかの形でお年寄りと関わりをもっている。特に施設のお年寄りとの交流をもった事があると答えた児童が多く、身体の不自由なお年寄りや困っているお年寄りとの関わりをもった事があると答えた児童も多い。

お年寄りと関わったことにより、「お年寄りのことが前にくらべてよくわかるようになった」「楽しくなった」と答えた児童が多く、「一緒にできるだけ過ごしたい」と思っていることがわかる。

### ④認知症の知識と子どもたちの介護観について

両学校とも認知症について情報として知っている児童が多い。

B小学校の児童は、認知症について知らないと回答した児童が多い(57%)が、具体的な内容については知らないなりに的を得た記述をしている児童が多い。

一方、グループホームのお年寄りと交流のあるA小学校の児童は「認知症について知っている」(32%)、聞いた事がことがある(43%)にもかかわらず、具体的な内容は無回答が多い。

「おじいさん、おばあさんが身体が不自由になったり、認知症になったらどう思いますか」という問いに対して、「家で世話をする」と回答した児童が多いが、A小学校15%、B小学校10%の児童は「施設で世話をしてもらうのがよい」と回答している。

### 考察の前に

アンケート調査を行う中で、当初B小学校は高齢者施設との交流がないと思っていたが、調査を行った後、6年生のみ特別養護老人ホームと交流があることがわかったため、考察については6年生の結果を比較検討する。

## 考察

アンケートの中でも、高齢者との関わりを問いかけている項目を中心に検討をする。

お年寄りとの関わりは、A・B小学校とも学校・クラスでの交流が主だっていることがわかった。その他の具体的な項目が未調査のため詳しく言及できないが、恐らく個人的及び小規模な関わりは少なく、学校・クラス単位で授業の一環として組み込まれていると考えられる。高齢者を助けたり、手伝いをしたりする事は、交流の中での体験も含まれていると思うが、交流を通して学び、感じたことの実践も含まれているのではないかと考える。

お年寄りの事が、B小学校は「前に比べてよくわかるようになった」り「一緒に何かをすることが楽しくなった」と答えた児童が8割以上を占めているのに対し、A小学校は6割を切っている。これは春と秋の2回、授業時間に歌や出し物を考え、喜んでもらおうと施設を訪問し、向かい合って高齢者と触れ合った児童と20分間の掃除時間に外庭の草抜き作業を一緒に行ったが、向かい合ってするのではなく一緒に時間を過ごしてきた児童との触れ合い方の相違があったから出てきた結果とも考えられる。

お年寄りとの交流に関しては、過半数が好意的な印象を持っていることが伺える。しかし、「とてもしたい」に対して数倍の「できるだけしたい」が多い回答を見ると、積極的に望んでいるかといえ、どちらかという受動的な印象を受ける。施設訪問はお互いがよそいき感覚で接し遠慮があったりするが、一緒に掃除を行って親しい関係になってくると指示をされたりし、自分の祖父母と同じような感覚で煩わしく感じ、一緒に過ごしたくないという気持ちが生じるのではないかと考えられる。B小学校は身体障害のあるお年寄りとの交流し、認知症のイメージがわきにくく、A小学校は祖父母との同居率も高く、認知症のあるお年寄りと身近に関わる機会があるのでイメージがわきやすくマイナスのイメージを持ち、余り関わりたくないと思っているのではないかと考えられる。

## 結論

高齢者と小学生が交流を図るときは、三世代の同居率が全般的に低い事を考慮に入れる必要がある。高齢者施設との交流活動を行うことにより小学生は高齢者に対する理解が深まっていくのではないかとこの仮説は、単に交流をして一緒に時間を過ごすというだけでは「理解をする」というまでは至らない。介護福祉士が、高齢者の身体的・知的・精神的な状態の変化や障害形態別に関わり方を伝える事で、子どもたちに正しく高齢者を理解してもらうことができ、専門性を活かす事ができるのではないかとと思われる。

## まとめ

世代間の交流をもつことが子どもにとっては良い体験になると思われる。しかし、安易に交流をすることは、逆に高齢者に対して否定的・拒否的なイメージを植え付ける危険性がある事に注意を払わなければならない。

交流を行う際に、子どもたちが高齢者に対してどのような思いを持って接するのを中心に、中長期的な活動になるように知識と体験の両面からの支援が必要になってくる。

これからの世代間交流、小学生との交流の中で介護福祉士がその専門的知識と技術を伝える事で疎遠になっている高齢者と子どもがよりよい交流が図れるように支援していきたい。

## 謝辞

今回、介護研究を進めるにあたり、アンケート調査に快く応じてくださった2つの学校の先生方、児童の皆さんに深く感謝いたします。また、ご指導賜りました矢原先生にお礼申し上げます。

## 引用文献

### 1) 少子高齢社会と子どもたち

編集 嗟峨座晴夫 出版 中央法規 発行年 2001年5月 引用ページ P8

## 参考文献

### ・少子高齢社会と子どもたち

編集 嗟峨座晴夫 出版 中央法規 発行年 2001年5月

### ・はじめての介護研究マニュアル

著者 矢原隆行 出版 保育社 発行年 2002年2月